

2019年 4月 4日

2018年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究 (○) ・個人研究 ()	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部 准教授 ケニヨン充子	
研究課題名	ピアエデュケーションによる学部学生への母性看護学技術演習の教育効果	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
岸田 泰子	看護学部・教授	研究統括、研究計画立案、専門的知識の助言、データ収集 (演習実施)、結果の解釈
研究期間	2018年1月1日 ～ 2019年3月31日	

研究実績の概要 (1)

I. 研究目的

本研究では、母性の看護技術の中でも妊娠・産褥期の観察、新生児の観察と沐浴に焦点を当て、より効果的に演習・実習を行なえるようピアエデュケーションを用いた事前・事後学習のプログラムを作成し、その教育効果を明らかにすることを目的に研究を行なった。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

1 施設における演習プログラム実施前後の比較による評価研究（仮説検証型研究）およびフォーカスグループインタビューを用いた混合研究である。

2. 対象者

1) ピアエデュケーター

母性看護学に関する講義・演習が終了し、実習終了若しくは実習中の4年生7名である。

2) 演習履修学生

母性看護学演習の履修登録を行なった学生84名である。研究対象者には、「母性看護学援助演習」の第1回目の講義開始時に、研究の主旨・目的・方法について文書と口頭で説明を行なった。研究への参加協力は、質問紙への回答、回収箱への投函を持って同意したとみなした。有効回答は69%であった。

3. データ収集方法

1) ピアエデュケーター

ピアエデュケーターには、研究参加同意後、「学習活動自己評価尺度－看護技術演習用－」および「一般性セルフエフィカシー尺度 (GSES)」に回答してもらい、母性看護技術の習得のため知識の復習を

研究実績の概要（2）

行なった。演習では、35~40分程度で担当する技術のデモンストレーションを行った。演習後、「学習活動自己評価尺度－看護技術演習用－」と「一般性セルフ・エフィカシー尺度（GSES）」に回答してもらった。さらに、個室で40分程度のグループインタビューを行ない、ピアエデュケーターの学びや演習前後での自己の変化、看護技術習得状況などを自由に語ってもらった。

2) 演習履修学生

演習開始前に「学習活動自己評価尺度－看護技術演習用－」に回答してもらい、演習終了後、「学習活動自己評価尺度－看護技術演習用－」、ピアエデュケーションに関する自作の質問紙、「授業過程評価スケール－看護技術演習用－」に回答してもらい、回収ボックスに投函してもらった。

4. 分析方法

統計解析用ソフト IBM SPSS Statistics24 を用いて、記述統計および対応ある t 検定を行った。インタビューデータは、質的帰納的に分析を行った。

5. 倫理的配慮

研究の主旨を説明し、以下の倫理的配慮を行った。研究への参加、協力は自由意思に基づくものであること、研究への参加、協力は研究途中であっても中断できること、匿名性の保証およびプライバシーの保護に努めること、データは研究意外には使用しないことを文書および口頭で説明した。本研究は研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

Ⅲ. 結果・考察

1) ピアエデュケーターへの教育効果

「学習活動自己評価尺度-看護技術演習用-」の総得点（平均値±標準偏差）は演習前 121.71±16.45 点から演習後 156.86±14.71 点に上昇しており有意な差がみられた（ $p=0.002$ ）。演習前 GSES は 7.14±2.47 点、演習後 GSES は 7.29±2.81 点と上昇したが、有意差は認められなかった。グループインタビューから 14 個のサブカテゴリー、【知識・技術の獲得】【自己肯定感の向上】【教育力の向上】【先輩としての役割認識】【仲間との学習の協働】という 5 個のカテゴリーを抽出した。より質の高い教育を行なうためには、エデュケーターの養成が不可欠といわれている。プログラムを通して、「教授するための努力」や「自己の再認識」を行なうことで、エデュケーターとしての能力も高まり、後輩の反応から、「充実感の体感」や「自己肯定感の向上」がみられたと考える。

2) 演習履修者への教育効果

エデュケーターの存在は学習意欲に影響があったかという質問では、非常に学習意欲が高まったと回答した学生は 33 名（58.9%）、やや学習意欲が高まったと回答した学生は 21 名（37.5%）、特に変化はなかったと回答した学生は 2 名（3.6%）であった。ピアエデュケーションによる知識や技術習得への効果について、非常に効果的だったと回答した学生は 36 名（64.3%）、やや効果的だったと回答した学生は 20 名（56.7%）であった。ピアエデュケーションによる授業の満足度は、非常に満足したと回答した学生は 30 名（53.6%）、やや満足したと回答した学生は 26 名（46.4%）であった。「授業過程評価スケール－看護技術演習用－」は、下位尺度 I～VI の平均点は、4.0～4.3 で満足度の高い結果であった。また、「学習活動自己評価尺度－看護技術演習用－」では、下位尺度 9 つとも、前に比べ後に得点が増加しており、下位尺度 III、VI 以外で有意差が認められた。今後は、【技術に自信が持てるように繰り返し練習する】【教わったことを理解して取り入れる】という下位尺度 III、VI を今後伸ばしていけるよう、練習環境の整備、アウトプットの方法を考えていく必要がある。以上のことから、本プログラムによりピアエデュケーター、履修者ともに、一定の教育効果が見られ有効な教育方法であることから、更にプログラム改良を進めつつ継続していく。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

【学会発表】

ケニヨン充子、三里久美子、梶谷由希子、岸田泰子：ピアエデュケーションを用いた母性看護学技術演習におけるピアエドゥケーターへの教育効果，第59回日本母性衛生学会学術集会，新潟，2018.9

【論文】

投稿用論文執筆中